兵庫

H28. 2. 23

Dr. 和の町医者日記

「認知症の基礎知識」シリーズ⑩

慢性硬膜下血腫　脳の外側に血液がたまって、もの忘れや歩行障害、尿失禁などの症状を示す病態。頭部を打撲して数週間経過してから発症する場合もあれば、打撲の既往がはっきりしない場合もある。

認知症の初回受診

子供の仮病に付き添ってもらう

「親が認知症のようで、どうすれば病院に連れて行けるのか。受診を勧めるとものすごく嫌がるのですが…」

最近、そんな相談をよく受けます。たいていの親は子供に「認知症では?」と言われると怒り出します。親としてのプライドがあるので当然といえば、当然です。あちこちに「もの忘れ外来」ができたものの、最初にそこに連れていくまでのハードルが結構高い場合が多い。認知症の発症から2～3年が経過して、初めて医療機関を受診させることができたという子供さんもいます。

嫌がる親を医療機関に連れていく方法はいくつかあります。まず、風邪をひいたときがチャンス。「ついでに健康診断も」という口実で検査を促します。あるいは、子供が風邪（実は仮病）で医療機関に行く際、「不安なので付き添ってほしい」と嘘をつく方法もあります。

子供のカルテをつくる必要はありません。診察室に呼び込むとき、子供さんの名前で呼ぶように受け付けに頼み、子供さんの胸に聴診器を当ててもらいます。横で見ている親に安心を与えることが大切です。私はおもむろに「お母さんは元気ですか。もの忘れなんかしませんか。私は最近、ひどくてね」などと、笑いながら世間話を始めます。話しているうちに不安が解け、「じゃあ、私もついでにもの忘れテストを受けて帰るわ」と言い出す人もいます。

そんな方法を試そうにも、頑として医療機関に行こうとしない親御さんもおられます。そんな場合は、こちらから自宅に押しかけることもあります。

「子供の友達が家に遊びに来た」という設定で、決して病気の話をせず、友人同士の世間話に徹します。それを聞いている親御さんにあいさつをして、「実は私、医者もやっているんです」なんて告白。「お母さん、何か困っていることはありませんか」と聞いてみます。

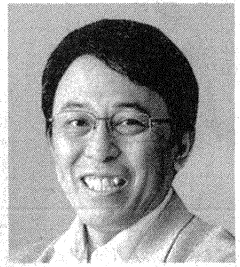
1回では無理でも2、3回訪問を繰り返すうち、徐々に警戒心が解けてきます。そして「私も一度、健康診断を」となることが何度もありました。認知症の受診は初回のハードルが高くても、一度それを越えてしまえば、あとは案外スムーズに進むことが大半です。

働き盛りのがんなら「早期発見・早期治療」が大切ですが、80歳を過ぎた親のボケを早く診断することに、どれだけの意味があるの?と思う人がいるかもしれません。そもそも子供が親の認知症を疑ったとき、医療機関に連れていく意味は何でしょうか。

ひとつは、本当に認知症なのかどうかをはっきりさせるためです。どんなタイプの認知症かを知っておけば、不可解な行動も受け入れられるようになります。

頭部CT、甲状腺ホルモン検査、ミニメンタルステート検査（MMSE）は認知症の診断に最低限必要な検査です。子供が勝手に認知症だと思っていても、頭部CTを撮ると、慢性硬膜下血腫であることも。血腫を除去する手術を受けると、嘘のように認知機能が回復した人を何人もみてきました。また、甲状腺ホルモンを補充すると、これまた嘘のようによくなった人もいました。

やはり最低限の検査は必要。また介護が必要ならば、介護認定の申し込みをしなくてはなりません。その際、必ず「主治医の意見書」が必要です。病院の専門医でも構いませんが、可能ならば普段の生活を知っている近所のかかりつけ医にお願いしてください。



長尾和宏（ながお・かずひろ）　東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで〝人を診る〟総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。57歳。